

1 四日市市の学校教育の基本方針

「新しい時代をたくましく切り拓いていく子どもの育成」

自分で生活・学習していこうとする力の育成（自立）

他とともに生活したり学んだりしていこうとする力の育成（共生）

自分の生き方や学び方の質をさらに高めようとする力や向上心の育成（チャレンジ）

四日市市の学校教育は「新しい時代をたくましく切り拓いていく子どもの育成」をめざしています。また、学校教育指導方針では、「新しい時代をたくましく切り拓いていく力」を、「自立」「共生」「チャレンジ」として具体的に説明しています。

2 現状の捉え

この3年間、「めざす子どもの姿」の実現のために、各学校では自校の「学校づくりビジョン」を策定して取組を進め、教育委員会は、そのために必要な諸施策の効果的な推進を図るように努めてきました。

教育委員会の諸施策の進捗状況については、「平成18年度版 四日市市学校教育白書」（以下「教育白書」）に15の重点の到達度として記載してあります。また、平成19年7月には、「四日市市子どもの家庭・学校生活実態調査」（以下「実態調査」）を3年ぶりに実施して結果をまとめました。

それらを基に現状と課題を次のように捉えました。

（1）学校生活全般について

実態調査では、学校での生活について、「楽しい」「まあまあ楽しい」と感じている子どもの割合は、各学年で82～89%であり、四日市市の子どもは概ね学校生活に満足していると言えます。

各学校の積極的な取組により、全体的に落ち着いた状態で、子どもたちが意欲的に教育活動を行っていると考えられます。

（2）毎日の授業の充実について

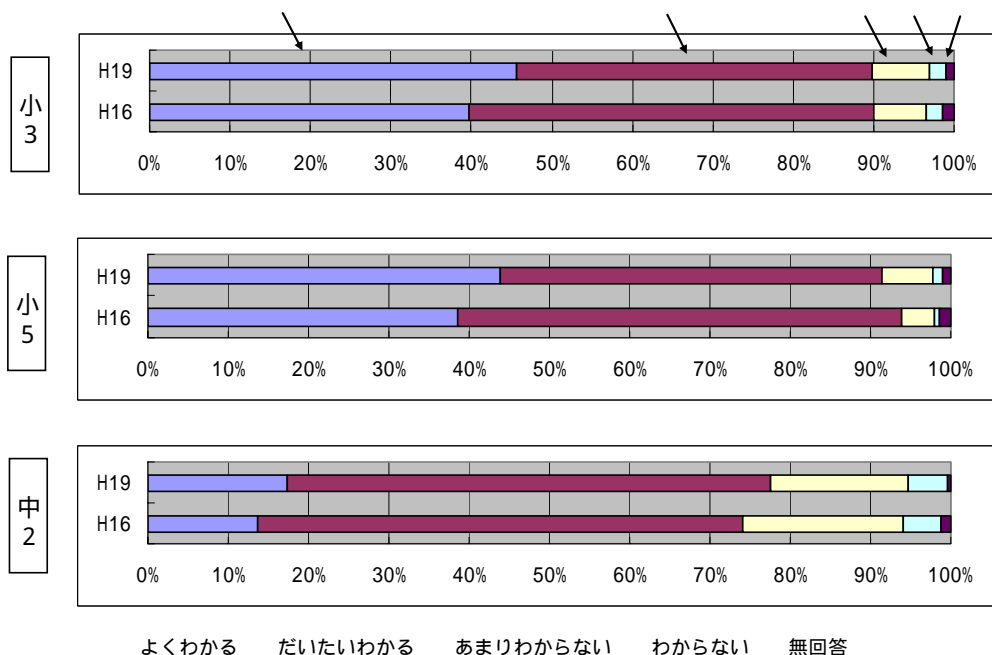
実態調査では、授業の理解について、「よくわかる」と答えた子どもの割合が、前回調査と比べて約4%増加しており、「だいたいわかる」と答えた子どもを合わせた割合では、中学校1年生までは各学年で90%前後と高い数値を示しています。また、教育白書にある「到達度検査の結果」によると、小学校では全国的な水準を3年間維持しており、中学校では各教科とも3年連続して到達度が上昇しているという結果が出ています。特に英語は全国と比べて極めて優れています。これらのことから、学校が「学校づくりビジョン」を明確にして教職員が一丸となってその達成に努めたり、教職員研修の充実（重点11）を図ったりしたこと等により、各学校において、毎日の授業の充実（重点1）をはじめ、子どもたちに学力をつける日々の取組が浸透してきていることがうかがえます。

全体的には授業の理解は向上傾向であるといえますが、「わからない」「あまりわからない」と答え

た子どもの割合が、中学校 1 年生では約 12%であったものが中学校 2 年生では約 22%と急増していることなど課題があります。また、到達度検査の分析として、「言語環境の充実 思考力の育成 学習に地道に努力する姿勢の向上」が教科を越えた課題として継続して挙げられています。

今後は、1 時間 1 時間の授業をさらに充実させるとともに、より効果的な少人数授業のあり方を探るなど、個に応じた指導を一層推進していく必要があると考えます。

あなたは、学校の授業がよくわかりますか。



(3) 人とのかかわり方について

実態調査によると、悩みや心配事を相談する相手として、自分の周りの様々な人を挙げている子どもが多くなり、友達に限らず、大人を含めた「人」とのかかわり方が前回の調査にくらべて改善しています。また、いじめについて、「絶対いけない」と考える子どもの割合が、小学校では約70%、中学校では約60%で、前回調査に比べて各学年で割合が増加しており、特に、小学校中学年で10ポイント以上増加しています。

このことは、人権教育の充実（重点6）や生徒指導の充実（重点9）に関する取組が浸透しつつあることがうかがわれますが、実態調査によれば「悩みや心配事を誰にも相談しない」子どもがどの学年も15%以上いること、教育白書の「不登校児童生徒数」によると不登校児童生徒数が依然として200人以上で、学年が上がるにつれて増加傾向にあることなどからも、さらにきめ細かい対応が必要だと考えます。

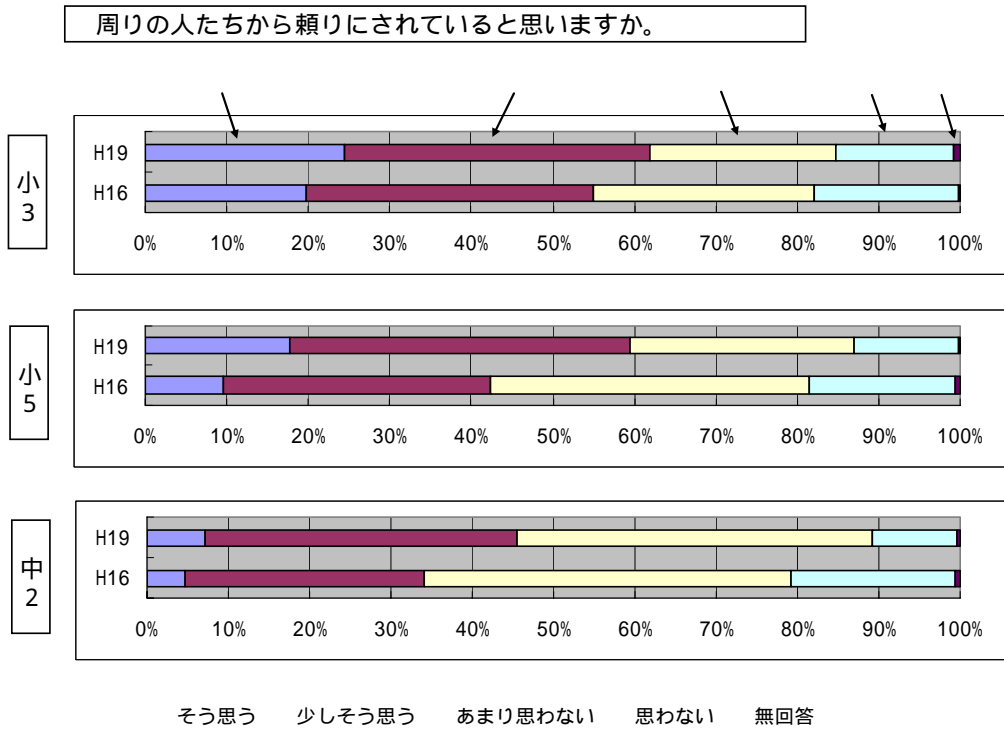
(4) 自分自身の肯定的な受けとめについて

実態調査では、「周りの人たち（家族、友達、先生など）から頼りにされていると思いますか」との設問に、「そう思う」「少しそう思う」と答えた子どもの割合は、小学校で約60%、中学校で約45%となっています。前回調査と比べると、小学校4年生以上では、どの学年も大幅に増加しています。全体的な傾向としては、前回の調査では平均38%であったのが今回は平均53%となっており、自分自身について肯定的な受け止め方をできる割合が高くなったといえます。

本市では、3年前の実態調査の結果において、周りの人から頼りにされていると思う子どもたちの

割合が他県の調査と比べて低いこともあり、「めざす子どもの姿」として「共に生きる力」を明示し、保護者・地域との協働の推進（重点12）を重点に掲げて取組を進めてきました。少しずつではありますが、改善の方向へ向かっていると考えます。

しかし、実態調査の「何事もやればできると思いますか」との設問に「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた子どもの割合が、中学校において前回調査より減少しています。様々な分野での成功体験が不足していることが1つの原因とも考えられます。自分に対する自信を持ってない子どもへの周りの大人たちのかかわり方が課題だといえます。



（5）「めざす子どもの姿」について

これまで述べてきたことなどから、四日市市がめざす子どもの姿としている「生きる力」「共に生きる力」の育成については、次のように捉えます。

「確かな学力」に関しては、上述したように、授業の理解度が向上していることなどから各教科の基礎的・基本的な内容の理解については概ねできていますが、到達度検査の結果などを考慮すると思考力や表現力の育成に課題があるといえます。「健康・体力」に関しては、新体力テストの結果が全体的に県よりやや低いことなどに課題があり、「運動に主体的に関わろうとしている子ども」を増やしていくために今後の取組の充実が必要です。「豊かな人間性」に関しては、文化・芸術体験が目標水準に比べて達成状況が低い状態であることなどが課題ですが、各学校では読書活動が推進され、職場体験など様々な体験活動も充実してきています。保護者・地域と、より一層の連携を図り、自らを律する心、他人を思いやる心、感動する心などを育てていきたいと考えます。

そして、四日市市が取り出して明示した「コミュニケーション力」や「互いに向上する人間関係」については、上記に詳述したように、人とのかかわり方が改善され、自分を肯定的に捉える子どもたちが増えていることなどから、全体として「他の意見を聞き、自分の思いを伝える力を身につけた子ども」「互いに切磋琢磨し向上しようとする子ども」が育ってきているといえます。

本市教育委員会は、「めざす子どもの姿」の実現のために、これまでの方向を堅持しながら、各学校現場の状況を的確に把握し、必要な教育施策を推進していきます。